

研究ノート

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖 (16) 柳／橘―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「柳」から「橘」までの題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかつた歌について注釈を加えるものである。本稿では九首を収めた。
 - 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
 - 肥前島原 松平文庫本 略称(松)
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
 - 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
 - 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
 - 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 四、本文は、踊り字を解消して当該の文字に改め、歴史的仮名遣いに統一する。本文を校訂した場合には、もとの本文を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名遣いの区別は底本のままとする。
 - 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
 - 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
 - ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
 - 寛文九年版本 略称(寛)
- 五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なるのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3 『古今和調六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月) 所収の影印

(松) 肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料

(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、柳橋の歌(四一五五〜四二六〇番)の別出歌一覧を付す。

注釈

四一六八(やなぎ)

【本文】

水の上にかげうちなびくあをやぎをなみのあやおるいとかとぞみる

【校異】○水の上に―水の面に(田) ○あをやぎを―青柳をの(林) ○な

みのあやおる―なみのあやを(宮)

【語釈】○うちなびく ゆるやかに横に揺れ動く。ここでは、春になっ

て枝葉が伸びた柳についていう。○なみのあやおるいと 「なみのあや」は、波によってつくられる水面の模様。さざなみのさまを綾織物にたとえていう語。水面に映る柳の枝を、織物を織る糸に見立てた。

【通釈】水面に映る影がなびく青柳を、波が綾を織る糸かと思つて見る。

【他出】なし

【考察】

水辺の青柳の枝が、なびきながら水面に映っているのを、波が綾織物を織る糸に見立てた歌である。「さざれなみよするあやをばあをやぎのかげのいとしておるかとぞみる」(土左日記・五六・あるひと)は、情景や表現が酷似する。

「なびく」「柳」は、夙に『万葉集』から詠まれ、「うちなびく春の柳と我がやどの梅の花とをいかにかわかむ」(巻五・八三〇・八二六・大典史氏大原)、「うちなびく春立ちぬらし我が門の柳の末にうぐひす鳴きつ」(巻十・一八二三・一八一九・鳥を詠む)といった例があり、平安期に入っても、「めにみえでかぜはふけどもあをやぎのなびくかたにぞはなはちりける」(亭子院歌合・二五・躬恒・左勝)、「我がおもふことはいはねどあをやぎのいとさへなびくものにざりける」(伊勢集・一八五・八条大将四十賀権中納言のし給ふ／柳おほかるいへ)、「春風になびくやなぎのいとよわみこころほそくてたゆるきみかな」(元真集・二二二)、「わぎもこがまゆににたれば青柳のなびくにつけてますなみだかな」(海人手古良集・九)などの歌が見える。ただし、勅撰集の初出は、『後拾遺集』「あさみどりみだれてなびくあをやぎのいろにぞはるのかぜもみえける」(春上・七六・藤原元真・だいしらず)を俟たねばならな

い。八代集においては『新古今集』に多く、その後は『玉葉集』『風雅集』といった京極派の集に目立つ。

柳の枝を糸に見立てた表現も『万葉集』から見え、「青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ児もがも」(巻十・一八五五・一八五二)、「我がかざす柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ」(巻十・一八六〇・一八五六)がある。勅撰集においても、『古今集』の「あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける」(春上・二六・つらゆき・歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる)、「あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か」(春上・二七・僧正遍昭・西大寺のほとりの柳をよめる)、「あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」(神あそびのうた・一〇八一・かへしものうた)に見られ、平安期の例は多い。

糸に見立てられる柳の枝で綾を織るという表現は、前掲『土左日記』の例の他、「いはやなぎはな色みれば山川の水のあやとぞあやまたれける」(近江御息所歌合・一六・いはやなぎ)、「水のあやのみだるる池に青柳の糸のかげさへ底にみえつつ」(貫之集・五〇二・同〈天慶〉五年亭子院御屏風のれうにうた廿一首)など、古今集時代から見出されるが、勅撰集においては、「かぜふけばなみのあやおるいけみづにいとひきそふるきしをあをやぎ」(金葉集二度本・二五・源雅兼朝臣・池岸柳をよめる)が唯一例である。なお、私家集では、『拾玉集』に用例が目立ち、「かげうつすやなぎのいとをたよりにて浪のあやおるたつた河かな」(四〇九・日吉百首和歌／春二十首)他の例がある。

「……かとぞみる」の用例は、『万葉集』にはなく、勅撰集では『古今集』が初出である。「白浪に秋のこのはのうかべるをあまのながせる舟

かとぞ見る」(古今集・秋下・三〇一・ふちはらのおきかぜ・寛平御時きさいの宮の歌合のうた)を含め、三首の歌があるが、このうち二首は『寛平御時后宮歌合』の歌である。八代集においては、『拾遺集』の五例、『千載集』の六例が目立つ。雪を花かと思間違うといった、自然物どうしを対象とする歌が多いが、当該歌や前掲『土左日記』の歌、『古今集』三〇一番歌は、自然物を人工物に見る例として注意される。なお、私家集における早い例としては、『興風集』『貫之集』に用例が多い。

四一七七(さくら)

【本文】

はるたてばさとにたなびくしらくもはさける桜の^(成)とほめなりけり

【校異】 ○集付―同(家集)(黒)

【語釈】 ○はるたてば「春立つ」は立春になる意。動詞「立つ」の已然形に接続助詞「ば」が付いて恒常的な条件を表す。○さと 人家が集まっている所。人が住まない山間に対する。○とほめ 遠目。遠方から見る事。遠くの眺め。遠望。

【通釈】 立春になると里にたなびく白雲は、咲いている桜の遠景なのだった。

【他出】 なし

【考察】

桜を白雲に見立てる場合、「桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲」(古今集・春上・五九・つらゆき・歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる)のように、山のあたりに見出すことが多し。これに対して当該歌は、里に見出すところが珍しい。あるいは

は、山から麓の里を遠望した作か。

「たなびく」「くも」は、『万葉集』に用例が多く、「北山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて」（巻二・一六一・一六一）、「雨はれて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき」（巻八・一五七三・一五六九）などの例が見られる。

平安期において、「たなびく」「しらくも」の用例が集中して見出されるのは『貫之集』である。「山の甲斐たなびきわたる白雲は遠き桜のみゆるなりけり」（三二一・延喜十四年十二月女四宮御屏風のれうのうた、ていじゐんの仰によりてたてまつる十五首）、「たなびかぬ時こそなけれあまもなきまつがさきよりみゆるしら雲」（一六七・延長二年ひだりのおとどの北のかたの御屏風のうた十二首／まつがさき）、「白雲のたなびきわたる足曳の山のたなはし我もわたらん」（三一七・延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うちうちの仰にてたてまつれる御屏風の歌廿七首／冬）、「山わけておちくるたきをしらくものたなびくとのみおどろかれつつ」（三五七・同じ〈承平〉七年右大臣殿屏風のうた／ひとはるかに山のときをみる）は、いずれも屏風歌で、屏風絵の図柄としても定着していたことが知られる。

「さけるさくら」の例も、『万葉集』に「春日なる 三笠の山に 月も出でぬかも 佐紀山に 咲ける桜の 花の見ゆべく」（巻十・一八九一・一八八七・旋頭歌）、「山峡に咲ける桜をただ一目君に見せて ば何をか思はむ」（巻十七・三九九〇・三九六七）という例を見出す他、平安期に入り、「わが宿に春こそほくきにけらしさける桜のかぎりな ければ」（貫之集・一七五・延長四年きよつらの民部卿六十賀、つねすけの中納言北方せられける／人の家にさくらのおほくさける所）、「つく

ば山さける桜のほひをばいりてをらねどよそながらみつ」（順集・六・あめつちのうた四十八首／春）などの歌があるが、用例はそれほど多くない。

「とほめ」の例は、『惠慶集』に三首見出されるのが目立つ。河原院で詠まれた、「とほめにはなほぞわかぬ山ざくらいざやどかりてゆきてをしまむ」（二七七・はるかに山のさくらをみる）の他、百首歌中に、「かすみわけとほめにみえし山ざくらそらにほひし花はいづらは」（二五八・あさか山なにはづを、かみしもにすゑたり 春）、「かすみたつみねやいづれぞたづねみむはなのとほめをまぎらはすかな」（三〇〇・たつみ）の二首がある。また、好忠の三百六十首和歌中に、「おほひえやをひえのやまも秋くればとほめもみえずきりのまがきに」（好忠集・二一五・七月をはり）という例がある。「をぐら山おりる雲はたに河のかはべのたづのとほめなりけり」（夫木抄・卷二十七・一二五九〇・花山院御製・大井河行幸に霜のつる地にたてるを雲のおるるかとうたがひ云）、「さはべはむこまのとほめはおしなべてあしのはなけと見えわたるかな」（高遠集・三二三・あしのなかに、こま、ものはむところ）という歌もあり、十世紀後半から比較的狭い範囲で和歌に用いられた語のように見受けられる。

四一八〇（さくら）

【本文】

人をよぶ物ならなくにさくらばなさけるをみれば心こそゆけ

【校異】なし

【語釈】○物ならなくに「ならなくに」は、……ではないのに、の意。

○心こそゆけ 「心行く」は、(身体は行かなくても)心はそこに飛んで行って、の意。初句の「呼ぶ」に対して「行く」と表現した。係助詞「こそ」を受け、動詞「行く」は已然形。

【通釈】 人を呼ぶものではないのに、桜の花は、咲いているのを見ると、心だけはそこに飛んで行くよ。

【他出】 なし

【考察】

桜の花は「人を呼ぶ」ものではないが、咲いているのを見ると、身体はそこに行くことができなくても、花を愛でたいという思い(心)だけは、花のもとに「行く」ものだという歌である。「山たかみくもぬに見ゆるさくら花心の行きてをらぬ日ぞなき」(古今集・賀・三五八・内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四季の多かけるうしろの屏風にかきたりけるうた)に通じる内容を、「呼ぶ」「行く」という語の対応を眼目として詠んでいる。

「ものならなく」という句は、『万葉集』には例がない。八代集においては、『古今集』に二例、『後撰集』に六例、『拾遺集』に一例見られ、貫之・伊勢の歌が目立つ。結句に用いられる傾向にあるが、当該歌のように第二句に用いる例もあり、「いとよる物ならなくにわかれちの心ほそくもおもほゆるかな」(古今集・羈旅・四一五・つらゆき・あづまへまかりける時みちにてよめる)といった歌が見える。

「さけるをみれば」の例は、「萩の花咲けるを見れば君に逢はずまことも久になりけるかも」(万葉集・卷十・二二八四・二二八〇)の他、「郭公なくべき時は藤花さけるをみればちかづきにけり」(貫之集・三八〇・天慶二年四月右大将殿御屏風の歌廿首／藤の花)があるが、極

めて少ない。当該歌も、これらの歌の表現の系譜に連なる詠と見られよう。

四二二一(さくら)

【本文】

人丸

さくらばなこづたひちらすうぐひすのうつし心もおもはなくに

【校異】 なし

【語釈】 ○こづたひ 「木伝ふ」は、枝から枝へと飛び移る意。 ○うつし心 移し心。移り気。心変わり。とくに男女の関係においていう。こは「現心」(正気・本心)の意ではない(【考察】参照)。

【通釈】 桜の花を、枝から枝へ飛び移って散らす鶯のような浮ついた気持ちで、私はあなたのことを恋い慕ってはいないのに。

【他出】 『源氏物語古注釈書引用和歌』(4) 河海抄 葵 一二〇九番

梅の花木づたひちらす鶯のうつし心も我がおもはなくに

【考察】

あちらこちらの枝を伝って桜を散らす鶯を浮気性だと見て、自分はそんな浮気心は持っていないと、恋の相手に対する誠実な気持ちを表現した、男性の立場で詠んだ歌である。

「こづたひちらす」という語は、夙に『万葉集』から見え、「いつしかもこの夜の明けむうぐひすの木伝ひ散らす梅の花見む」(巻十・一八七七・一八七三)、「袖垂れていざ我が園にうぐひすの木伝ひ散らす梅の花見に」(巻十九・四三〇二・四二七七・右の一首、大和国守藤原永手朝臣)というように、梅の花を散らす鶯について用いられた。これら二首の万葉歌は、後に『古今六帖』第六「むめ」題の歌(四一四八番、

四一二五番)として収められている。また、平安期に入ると、「百千鳥こづたひちらす桜花いづれの春かきつつみざらむ」(貫之集・五七・延喜十五年九月廿二日右大将御六十賀清和の七宮御息所のつかうまつりたまひけるとき屏風料歌四首春)、「うぐひすのこづたひちらす桜花こや春の日のおそきなりけり」(海人手古良集・八九・春の花に鶯むつる)の例があり、やはり前者は『古今六帖』第六「さくら」題の歌(四一七一)に載る。だが平安期までの例はこれらが挙げられる程度であり、万葉風の表現と見てよいだろう。

「うつし心」(移し心)の例も、『万葉集』から見える。ただし、「現心」の例が、卷十一、二三八〇(二三七六)番、二八〇二(二七九二)番、卷十二、二九七二(二九六〇)番、三三二五(三三二一)番や、卷七、一三四七(一三四三)番左注の異伝歌に見出されるのに対し、「移し心」は、「うちひさす宮にはあれど月草の移情(ウツシゴコロハ)我が思はなくに」(卷十二・三〇七二・三〇五八)、「百に千に人は言ふとも月草の移情(ウツシゴコロハ)我持ためやも」(卷十二・三〇七三・三〇五九)に見える「移情」の西本願寺本の訓である。現代の新訓では、「うつろふところ」とされる箇所であるが、『古今六帖』当該歌の「うつし心」は、この西本願寺本に見られる訓に由来する語と見ることができよう。

平安期においては、染料として用いられるが色の褪せやすい「月草」(露草)を冠した、「月草のうつし心」という表現で、もっぱら用いられる。『古今集』の「いで人は事のみぞよき月草のうつし心はいることにして」(恋四・七一・よみ人しらず・題しらず)をはじめ、「ゆふさればやまのはにいづるつきくさのうつしごころはきみにそめてき」(亭子院歌合・六四・右)や、『敦忠集』の贈答歌、「たのみつつとし月くさに

へにければうつしごころにうたがはれける」(一〇七・宮)、「君をおきてわれはたれにかつきくさのうつしごころのいろもかはらむ」(二〇八・かへし)がある。当該歌の「うぐひすのうつし心」は、その点で極めて珍しい。

「わがおもはなくに」は、『万葉集』に集中して見られる表現である。勅撰集においては『後撰集』を初出とし、八代集では、「ひたすらにわがおもはなくに」のおのれさへかりかりとのみなきわたらん」(後撰集・秋下・三六四・よみ人しらず・題しらず)、「色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはわがおもはなくに」(拾遺集・恋三・八四二・つらゆき・女の許につかはしける)の二首を数えるのみである。後の十三代集でも、人麿歌や読み人知らず歌など三首を収めるに過ぎない。

四二二五(さくら)

【本文】

はるさめにあれびてさける桜ばなつねにちらさでみるよしもかも

【校異】 ○あれびて―あれびて(黒) (寛) ○もかも―もかな(永)も哉(松・羅・田)もかな(和・宮・黒)

【語釈】 ○あれびて「荒(あれ)ぶ」は、風などが激しく吹く、荒れる意。 ○つねに ずっと変わらずに。 ○もかも 願望を表す。主として上代に見られる。

【通釈】 春雨に打たれて激しく揺れて咲いている桜の花は、ずっと変わらずに散らさず見る方法がほしいものだ。

【他出】 なし

【考察】

桜の花が散るのは、「花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよ
行きてうらみむ」(古今集・春下・七六・そせい法し・さくらの花のち
り侍りけるを見てよみける)といった歌からも知られるように、風のせ
いだとして詠まれることが多い。これに対して当該歌は、春雨が桜の花
に降り掛かって激しく揺らしているのを見て、散らさずはずっと見てい
たいという心情を詠んだ歌である。

「ちらさで」「見る」という例は、「くものうへにかぜはふかせじも
みぢばをつきのうちだにちらさでをみむ」(陽成院一親王姫君達歌合・
三四・左勝)、「いかでかはちらさでくべきふぢのはな風によりてぞなみ
もたつらめ」(忠見集・一七三・きたのみやよりとて、ふぢのはなたま
へるに)、「桜花ちらさでちよを見てしかなあかぬころはさてもありや
と」(元真集・一二〇・春くらびとどころに、かれこれ右近のむまばに
て桜ををしむ)など平安歌人の歌の他、平安期成立の万葉歌人の私家集
にも、「さくら花われはちらさであをによしみやこの人のきつつみにし
ぞ」(赤人集・解題・九)、「たかまどののべのあきはぎちらさではきみ
が かたみと見つつしのばむ」(家持集・一八二)といった歌を見出す。
また、『古今六帖』にも他に、「我が宿のをばなおしなみ置く露にてふれ
わがせこちらさでも見ん」(第一・五五六・つゆ)という例がある。

「みるよしもがも」は、万葉表現と見られる。「見依鴨」(巻
七・一三〇四・一三〇〇、巻十一・二三七五・二三七一、巻
十一・二五〇〇・二四九五)、「見因鴨」(巻十一・二四五四・二四五〇)、
「見因欲得」(巻十一・二七四四・二七三五)、「見因毛欲得」(巻
十一・二七八五・二七七五)と表記されるが、現代の新訓では「みむよし

もがも」とされる。『古今六帖』の当該歌と一致するのは、西本願寺本
の訓である。

四二二八(花ざくら)

【本文】

はなざくらをるにたもとのひちぬればつゆにかかれる色にぞ有りける

【校異】なし

【語釈】○花ざくら 花が咲いている桜。○ひちぬれば「ひつ」は、

濡れる意。後世「ひづ」となったというが、ここでは清音とした。「ぬ
れば」は、完了の助動詞「ぬ」の已然形に接続助詞「ば」が付いたもの。
順接確定条件を表す。

【通釈】花が咲いている桜の枝を折ると袖が濡れてしまったので、(桜の
花の美しさは)露が掛かったつややかさだったのだと気づいたよ。

【他出】なし

【考察】

花の咲いた桜の枝を手折ってみると袂が露で濡れたことから、花の美
しさを引き立てていたのは露だったのだと気づいたという歌である。

「はなざくら」の用例は、『寛平御時后宮歌合』に、「鶯はむべもなく
らん花ざくら咲くとみしまにうつろひにけり」(九・左)、「浅みどり野
辺の霞はつつめどもこぼれて匂ふはな桜かな」(一一・左)の二首の歌
があり、また、勅撰集においては、『古今集』に、「空蟬の世にもにたる
か花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」(春下・七三・よみ人しらず・
題しらず)という例が見出せる。

また、「はなざくら」を手折ることは、「花ざくらかでか人のをりて

みぬのちこそまさる色もいでこめ」(御所本躬恒集・一五五・延喜十二年三月十八日亭子院和歌合に)、「あかでけふかへるとおもへばはなざくらをるべきはるぞつきせざりける」(中務集・一一・三条のおほいまうちぎみ権中納言とつかうまつれる屏風のゑに、花みてかへる所)、「をりにことおもひやすらん花ざくらありしみゆきの春をこひつつ」(円融院御集・七・堀河院におはしまして、閑院大将のすみわたりける所の花の見えければ、つかはしける、三月の事なり／御返し、朝光大将)などの歌に詠まれる。

露に濡れる桜の花は、当該歌の他、「さくらみにありあけのつきにおきたればわれよりさきにつゆぞおきける」(忠見集・一〇一・ひとのこの、さくらのをりたるえだをもたるをみて)のように、情景そのものを詠む歌もある。だが、露を涙の比喩として詠む例が多く、「としごとにさくらはみれどいかなればけふをるそでのつゆもかはらぬ」(朝忠集・六三・す尺院のみかど、院にいでさせたまて、御ぶつ命のあしたに、けづり花にさして、御あそびのをりに)、「みる毎に袂ぞぬるる桜花そらより外のつゆやおくらん」(清慎公集・一〇〇・同年〈康保二年〉二月廿六日、看旧庭、難抑悲恋兼盛元輔能宣等伺候云云)、「こころみにをりもしあらばつたへなんさかで露けき桜ありきと」(元輔集・一七六・つかさめしの後、うちにさぶらひし人のもにつかはしし)、「つゆけくもなりまさるかなさくらばなもとのしたくさはらふ人なみ」(尊経閣本元輔集・一四八・あるたのいへ)、「さくらばなにはふものからつゆけきはこめものぞおもひしらるる」(能宣集・二〇三・小野宮のおほいまうちぎみのきたのかたのかくれ侍りて、まへなるさくらをみはべりて、うたよめとはべりしかば)、「さくら花つゆにぬれたるかほ見ればなきてわ

かれし人ぞこひしき」(拾遺抄・別・一九五・読人不知・題不知)などの歌がある。露に濡れた桜の花は、平安中期における美的情景のひとつの型であったことがわかる。

なお、「つゆにかかれる」という表現は、『新編国歌大観』を検する限り、『新撰万葉集』(上・六七)にも収められている「空蟬の侘びしきものを夏草の露にかかれる身にこそ有りけれ」(寛平御時后宮歌合・四三・左)を見出すのみである。ここでも「露」は涙の比喩でもある。

四二二〇(山ざくら)

【本文】

山もせよにさけるさくらのにくからぬいもにあひみてこふる比かも

【校異】○山もよに―山もせに(和・宮)山もとよ(林)○いも・あひみて―いもにあひみて(永・林)妹にあひ見て(松・羅・黒)妹にあひみて(和・宮・田・寛)○頭注―今日もよはもせの誤(黒)

【語釈】○せに「せに」は、「……もせ(狭)に」の形で、……も狭くなるほどに、……もいっぱい、の意。諸本「よに」であるのを校訂した。「よ」の字母は、諸本「与」になっているが、元来「せ」の字母として用いられていた「世」が「よ」と読み誤られたか。ちなみに、「よに」という本文をとる場合、世間で比べるものがないほどの意から、程度がはなはだしいさまを表し、非常に、たいへん、たいそうの意となるが、初句の意味が解しにくくなる。○さけるさくら 咲いている桜。『古今六帖』四一七七番〔考察〕参照。○いも 男性から結婚の対象となる女性や、すでに結婚した妻をいう語。ここでは後者。○あひみて「あひみる」は、男女が結婚する意。

【通釈】 山もいっばいに咲いている桜のように、憎くはない(魅力的な)妻と契りを結んで、恋い慕う今日この頃だよ。

【他出】 なし

【考察】

妻を全山満開の桜にたとえ、そんな魅力的な妻を得て、恋い慕わずにはいられないという男性の心情を詠んだ歌である。

「やまもせに」という表現は、『万葉集』に「……山も狭に 咲けるあしびの 悪しからぬ 君をいつしか 行きてはや見む」(万葉集・巻八・一四三二・二四二八)という例が見え、その平安朝における異伝歌が「山もせにさけるつつじのくからぬきみをいつしかゆきてはやみむ」(家持集・三六)である。いわゆる万葉風の表現と見られるが、平安期においても、「……もせに」という表現は、「やどもせにうゑなめつつぞわれはみるまねくを花に人とまるやと」(伊勢集・二四一)、「秋くれば野もせに虫のおりみだるこゑのあやをばたれかきるらん」(後撰集・秋上・二六二・藤原元善朝臣・題しらず)などと詠まれる。「にくからぬ(にくくあらぬ) いも」という表現も、「里人の言より妻(いも)を荒垣のよそにや我が見む憎くあらなくに」(万葉集・巻十一・二五六七・二五六二)という例があり、やはり『万葉集』由来であろう。

また、下句「いもにあひみてこふるころかも」は、「玉梓の道行きぶりに思はぬに妹を相見て恋ふるころかも」(巻十一・二六一〇・二六〇五)とほぼ同一歌句と見做される。

以上の観点から、当該歌は、現存する万葉歌には見当たらないが、少なくともそのバリエーションとして詠まれたものと考えられる。

四二四〇(ふぢ)

【本文】

みなそこにかげをうつしてこむらさきそめてかけたるきしの藤なみ

【校異】 ○きしの藤なみ―峯きしの藤なみ(宮)

【語釈】 ○かげ 影。水に映って見える姿。 ○うつして (姿を)映して。植物を布に擦り付けて色を染み込ませる意の「移す」を響かせる。

○こむらさき 濃く黒みがかった紫色。 ○そめてかけたる 「染め掛く」は、布を染めて、乾かすために掛ける意。藤の花房の影を濃紫の布に見立てて用いた語。「掛く」は「(藤)波」の縁語。 ○藤なみ 藤の花房がなびいて動くさまが、ちょうど波の打ち寄せるような動きであるところからいう。

【通釈】 水底に影を映して、濃紫に波を染めて寄せ掛けている、岸边に生える藤の花房よ。

【他出】 なし

【考察】

岸边に生えている藤が水底に影を落とすと、波が濃い紫色に染まり、まるで藤の花房が岸に打ち掛かっているように見える。そのような情景を布に見立て、「移す」「染め掛く」という染色に関する語を用いて詠んだ歌である。

「みなそこ」「かげ」「ふぢ」の組み合わせは、『貫之集』に、「水底に影さへ深き藤の花の色にやさをはさすらん」(四一四・同じ御時うちの仰事にて/四月池のほとりの藤の花)、「水底に影をうつして藤の花千世まつとこそにはふべらなれ」(六九六・延喜十二年定方左衛門督の賀の時の歌)の二首の歌が見える。とくに後者は、初句・第二句が、当該

歌と一致する。「影みえてはるはゆかなんみなそこにほふぢなみをりもとむべく」(清正集・一一・おなじころ(三月)、ふぢつほのふぢのがのえせられけるに)の例も含めて、賀の歌で詠まれる傾向があるようである。

また、「こむらさき」の「ふぢ」も、「藤の花色ふかけれやかけみれば池の水さえこむらさきなる」(貫之集・六二・延喜十六年齋院御屏風のれうの歌、内裏より仰うけ給はりて六首/池のほとりにさける藤の本に、女どものあそびて花のかけをみたる)、「こむらさき昔しの色もあせずして立ちかへりつつにほふふぢなみ」(清正集・一〇・おなじころ、ふぢつほのふぢのがのえせられけるに)、「ふぢのはないろふかけれやかけみればいけのみづさへこむらさきなる」(内裏歌合(天徳四年)・四五)、「こむらさきにはへるふぢのはなみればみづなきそらになみぞたちける」(能宣集・二〇五・あるところにて、にはのまへなるふぢのはなをよみはべりし)、「こむらさきいとよりはへてふぢのはなくる春ごといろはまさらむ」(尊経閣本元輔集・五九)など、平安中期までの用例は少なくなく、ひとつの類型表現だったことがわかる。

「そめてかく」(そめかく)の用例は、『万葉集』に、「浅緑染め掛けたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも」(巻十・一八五・一八四七)と見え、また『催馬楽』にも、「浅緑 濃い縹 染め掛けたりとも見るまでに 玉光る 下光る 新京朱雀の垂柳」(浅緑)とあるなど、柳についていうことが多い。他にも、「さほひめのいとそめかくるあをやぎをふきなみだりそ春の山風」(天徳四年内裏歌合・九・兼盛・四番柳 右勝)といった例がある。当該歌のような藤の例は意外と見当たらず、『新編国歌大観』を検しても、「いくしほか染めてかくらんいろめで

ぬまがきの島のきしの藤なみ」(夫木抄・二二二・祭主輔親・家集、障子絵に籬島のきしをめぐりて藤花あり)を見出す程度である。

「きしのふぢなみ」の平安中期の用例は多い。「かぜふけばおもほゆるかなすみのえのきしのふぢなみいまやさくらむ」(亭子院歌合・三二・兼行王・右)、「われゆきていろみるばかりすみよしのきしのふぢなみなりなつくしそ」(内裏歌合(天徳四年)・一九・兼盛・右勝)といった歌合歌の他、私家集にも、「春の末なつのもとにはかはれどもまつにみだれぬきしの藤浪」(海人手古良集・一〇)、「しらかはのなにぞたがへるけふみればきしのふぢなみむらさきにして」(能宣集・一一・おなじ日(卯月一日)しらかはの院にて、人人のふぢの花をもてあそぶ)、「すみよしのきしのふぢなみ春ふかくいくしほにかはいろまさるらん」(中務集・七二)などの例が見える。さらに、「住吉のきしの藤なみわがやどの松の木ずゑに色もまさらじ」(兼盛集・一八三・うちの御屏風のれう/藤のはなを人をもる)、「こぐ舟のきしのふぢ浪たかければまづころをぞよすべかりける」(恵慶集・一七・また、あるところの御屏風の歌甲の帖/うみのつらにふぢのはなさけり、ふねよせて人をらむと思ひて侍る所)は、屏風歌であり、屏風絵の図柄としても定着していたことがわかる。

四二五一(たちばな)

【本文】

つらゆき

ときはなる花とおもへばやほととぎすはなたちばなにこゑのかはらぬ
【校異】 ○花とおもへばや―花とおもへは(和)はなとおもへは(宮)
花と思へは(林)

【語釈】 ○ときはなる 「ときは」は、永久に続くこと。ここでは、花がいつも変わらず咲いていることをいう。○ほととぎす 夏を告げる鳥。花橋との組み合わせは『万葉集』から多い。○はなたちばな 花の咲いている橋。橋はミカン科の常緑低木で、初夏には香りの高い白い花をつける。

【通釈】 いつも変わらずに咲いている花だと思っっているからか、時鳥は(毎年)、花の咲いている橋の枝で鳴く声が変わらない。

【他出】 なし

【考察】

橋の花が、夏の到来を告げる時鳥の鳴く頃に咲くことにちなみ、時鳥が毎年、変わらぬ声で鳴くのは、橋の花はいつも変わらずに咲いているものだと思っっているからではないか、と推量した歌である。

「ほととぎす」と「はなたちばな」の組み合わせは、『万葉集』から見られる。「我がやどの花橋にほととぎす今こそ鳴かめ友に逢へる時」(巻八・四八五・四八一・大伴書持が歌二首)、「ほととぎす花橋の枝に居て鳴きとよもせば花は散りつつ」(巻十・一九五三・一九五〇)などの例がある。

また、時鳥の鳴き声が毎年変わることがないことは、「この夏もかはらざりけりはつこゑはならしのをかになくほととぎす」(亭子院歌合・解題二・右)、「こぞの夏なきふるしてし郭公それからぬかこゑのかはらぬ」(古今集・夏・一五九・よみ人しらず・題しらず)、「としごとこゑもかはらぬほととぎすあかぬころはめづらしきかな」(躬恒集・四四七・あるところのさぶらひにさけたびけるに、めしあげられて、ほととぎすよめとはべりければ)といった例の他、「あやめくさねもかは

らねどほととぎすおどろかれぬるこぞのふるこゑ」(尊経閣本元輔集・一四九・あるたのいへ)、「としごとにめづらしけれどほととぎすむかしのこゑもかはらざりけり」(道濟集・六九・宰相中将殿にて、春におくられたること昨日といふ事を)にも詠まれている。当該歌も、これらの表現類型に即した詠と見ることができよう。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一五年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。里中佑梨(四二一八番)、浦川暁美(四一六八・四二五一番)、松浦泰一(四一六八・四二二〇番)、久田真由(四一七七・四二二〇番)、小方樹(四一八〇・四二五一番)、川勝一輝(四二二一・四二四〇番)、國吉匠(四二二〇番)、北原優(四二四〇番)が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」(同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号16K00469、二〇一六―二〇一八年度)の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器e-CSA Ver.2.00、を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・

国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、4155～4260番―

凡例

- 1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。
- 2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一卷 1古今和歌集～4後拾遺和歌集

第二卷 1万葉集～6和漢朗詠集

第三卷 1人丸集～81赤染衛門集

第五卷 民部卿家歌合～61源大納言家歌合長久二年、253紀師匠曲水宴和歌

～269九品和歌、281歌経標式（真本）～285新撰髓脳290新撰和歌髓脳、

347古事記～353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記～393

和泉式部日記、414竹取物語～420落窪物語

第六卷 2秋萩集～5麗花集

第七卷 1奈良帝御集～36肥後集

なお、『新編国歌大観』に別出が認められない場合は、適宜『新編私家集大成』を参看した。

- 3、別出歌は、『新編国歌大観』（あるいは『新編私家集大成』）の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〔例〕3-19貫之355『新編国歌大観』第三卷19番目の「貫之集」355番歌

- 4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるのみに限る。

- 5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざま類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいもの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〔参考〕と記し、波線を付す。

- 6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〔未詳〕と記し、傍線を付す。

やなぎ

4155 いなむしろかはぞひやなぎみづゆけばおきふしすれどそのねたえせず

5-348日本紀83「なびきおきたち」〔そのねはうせず〕

4156 いとをのみたえずよりいだすあをやぎをとしのを長きしるとぞ思ふ

3-19貫之269「たえずよりつる」〔青柳の〕

4157 春ごとにたえせぬ物はあをやぎの風にくりいだすいとにぞ有りける

3-19貫之283「風にみだるる」

4158 よる人もなきあをやぎのいとなればふきくる風にかつみだれつつ

3-19貫之98

4159 あをやぎのえだにかかれるしらつゆをいともてぬける玉かとぞ見る（つらゆき）

3-15伊勢集101「春さめを」、5-10亭子合1「はるさめは」、2-6和

漢朗86「はるさめは」、5-266三十人31「はるさめは」、5-267三十六31「春

雨は」

4160 はるさめのふりそめしよりあをやぎのいとはなだぞ色まさりゆく（みつね）

4161 3-12 躬恒 398 「いとのはなだに」、7-5 躬恒 44 「いとのはなにぞ」
めにみえて風はふけども青柳のなびくかたにぞ花はみえける(みつね)

5-10 亭子合 25 「はなはちりける」、7-5 躬恒 158 「風はふくとも」
「花はちりける」

4162 青柳のいとよりかくるはるしもぞみだれて花のほころびにける(へせう)

1-1 古今 26、2-3 新撰和 61、2-6 和漢朗 110 「みだれてはなは」

あをやぎのいとよりかけておるはたはいづれの山のうぐひすかきる

3-15 伊勢集 457、1-2 後撰 58 「いとよりはへて」 「おるはたを」

花見にも行くべきものを青柳のいとてにかけてけふはくらしつ(へせう)

3-19 貫之 48、5-26 和十種 42 「あしやぎの」、5-26 和十体 18 「いと

にかかりて」 「けふもくらしつ」

あをやぎのえだにかかれるはる雨をいともてぬけるたまかとぞみる(伊勢)

3-15 伊勢集 101、5-10 亭子合 1 「はるさめは」、2-6 和漢朗 86 「は

るさめは」、5-26 三十人 31 「はるさめは」、5-26 三十六 31 「春雨は」

はるのあめのうちふることにわがやどの柳のすゑはいろづきにけり

私 1-増人麿 IV 104 「春さめの」、私 1-3 人麿 II 19 「はるさめの」 「やな

きか枝は」、私 1-4 人麿 III 41 「ウチフルコトニ」 「ヤナキノエタハ」

はるくればしだりやなぎのとををにもいもが心によりにけるかな

2-1 万葉 1900 「はるされば」 「いもはこころに」 「のりにけるかも」、2

6 和漢朗 111 「はるくれば」 「まよふいと」 「なりにけるかな」

水の上にかげうちなびくあをやぎをなみのあやおるとかとぞみる
(未詳)

さくら

4169 石ばしる滝なくもがなさくら花たをりもてこんみぬ人のため

1-1 古今 54 「たをりてもこむ」、3-3 家持 308 「たをりてもこん」、3

4 猿丸 50 「たをりてもこん」

4170 わがやどの物なりながら桜はなちるをばえこそとどめざりけれ(つらゆき)

3-19 貫之 49

4171 ももちどりこづたひちらす桜ばないづれのはるかきつつみざらん

(これより十五首つらゆき)

3-19 貫之 57

4172 をしみにときつるかひなく桜花みればかつこそちりまさりけれ

3-19 貫之 73

4173 玉ぼこの道はなほまだとほけれど桜をみればながるしぬべし

3-19 貫之 92

4174 おほかりと思ふものから桜ばなみる所にはやすくやは行く

3-19 貫之 93 「あだなりと」 「みゆる所は」

4175 かつみつあかずおもへば桜ばな散りなん後ぞかねてこひしき

3-19 貫之 105 「あかずとおもふに」

4176 さくらよりまさる花なき春なればあだしくさはを物とやはみる

3-19 貫之 270 「あたらしさをば」、2-3 新撰和 67 「桜いろに」 「まさる

いろなき」 「花なれば」 「あたらくさ木も」 「ものならなくに」

4177 はるたてばさとにたなびくしらくもはさける桜のとほめなりけり
(未詳)

4178 桜ばなふりにふるともみる人のころもぬるべき雪ならなくに

3-19 貫之 505

- 4179 ことならばさかずやはあらぬ桜はなみる我さへにしづ心なし
1-1 古今82
- 4180 人をよぶ物ならなくにさくらばなさけるをみれば心こそゆけ
(未詳)
- 4181 しら雲とみえつるものを桜ばな今はちるとや色ことになる
1-2 後撰119 「けふはちるとや」
- 4182 さくらちるこのした風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける
3-19 貫之818、7-7 貫之43、5-10 亭子合13、2-3 新撰和81、1-3 拾遺集64、1-3 拾遺抄42、2-5 金玉14、2-6 和漢朗131、5-52 前十五1、5-264 和十種45、5-266 三十人17、5-267 三十六16、5-268 深窓秘25
- 4183 ちるがうへに又もちるかな桜ばなかくてぞこそのはるもすぎにし
7-7 貫之21 「ちりもまがふか」 「はるもくれしか」、3-19 貫之817 「ちりもまがよふ」 「かくしてこそは」 「春も過ぎしか」、2-3 新撰和111 「さくがうへに」 「ちりもまがふか」 「かくてぞこそも」 「春は暮れにし」
- 4184 そがごとくちりしまがへばさくらばなふりにし雪のかたみとぞ見る
3-19 貫之117 「おなじ色に」
- 4185 さくらには心のみこそくるしけれあきてちらせるはるしななければ
3-19 貫之820 「あきてくらせる」
- 4186 いままでにちらずはあれど桜ばななきものとのみおもほゆるかな(みつね六首)
7-5 躬恒23 「むめのはな」、3-12 躬恒372 「ちらずはありとも」 「むめの花」 「こきものとのみ」 「おもひけるかな」
- 4187 一つのまにちりはてにけん桜ばなおもかげにのみ色をみせつつ
1-2 後撰132 「ちりはてぬらん」、7-5 躬恒265 「色はみえつつ」、3-1
- 4188 12 躬恒378 「ちりはてぬらむ」 「いまはみえつつ」
桜ばなわがやどにのみありとみばなきものぐさはおもはざらまし
3-12 躬恒350、7-5 躬恒3、1-3 拾遺集1038、1-3 拾遺抄395
- 4189 雪とのみふるだにあるをさくらばないかにせよとか風のふくらん
1-1 古今86 「いかにちれとか」、7-5 躬恒12 「いかにちれとか」、7-5 躬恒268 「ちるだにあるを」、3-12 躬恒377 「ゆきかへり」 「みるだにあるを」
- 4190 風ふかぬほどにをりてん桜ばな我がてからこそちらばちらさめ
7-5 躬恒36 「我が手にてこそ」
- 4191 うつつにはさらにもいはじ桜ばな夢にもちるとみえぼうからん
5-10 亭子合23、7-5 躬恒157 「うつつをば」 「見ればうからむ」
- 4192 をしみずはわがおいらくはさくらばなかさして後ぞおいわすれける
7-5 躬恒52 「をしみつる」 「かさしてのみぞ」 「をりわすれける」
- 4193 我がごとや人もみるらん桜ばなあくことしらぬ色にもあるかな(みつね)
7-5 躬恒54、3-12 躬恒404 「あらししらぬ」
- 4194 さくらばなよのまちなん後やいかにけふこそゆきてをらばをりてめ(おなじ)
7-5 躬恒63 「山にちりなん」 「をらまほしけれ」、3-12 躬恒410 「やまにちりなん」 「のちはいかに」 「をらまほしけれ」
- 4195 いろもかもむかしながらにさくらめどとしふる人ぞあらたまりける(ともり)
3-11 友則4、1-1 古今57 「おなじむかしに」
- 4196 ひさかたのひかりさやけきはるの日にしづ心なくはなのちるらん
1-1 古今84 「ひかりのどけき」、3-11 友則6 「ひかりのどけき」
- 4197 までといふにちらでしとまる物ならば何をさくらに思ひまさまし(そせい)
1-1 古今70、6-3 継色紙1、3-9 素性10 「いかにさくらを」

- 4198 いざさくら我もちりなん一さかりありなば人にうきめ見えなん(おなじ)
 1-1古今77、3-9素性40「有りなばうきめ」「人にみえなむ」、5-
 415伊勢語227「散らばありなむ」「なれなば憂きめ」「見えもこそすれ」
 みてのみや人にかたらん桜はなてごにをりて家づとにせん(おなじ)
- 4199 1-1古今55、2-3新撰和47「山ざくら」、3-9素性8「やまざく
 ら」、2-6和漢朗125「山桜」、5-266三十人51「やまざくら」、5-
 267三十六54「山ざくら」、5-268深窓秘18「やまざくら」
- 4200 さくらいろにころもはふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに
 (きのありとも)
- 4201 1-1古今66、2-3新撰和65
 さくらばなちらばちらなんちらずとも古郷人のきてもみなくに
 (これたかのみこ)
- 4202 1-1古今74「ちらずとて」、2-3新撰和71「ちらずとて」
 はるがすみ何かくすらん桜はなちるまをだにもみるべきものを(ふかやぶ)
- 4203 1-1古今79、3-39深養父3
 たれこめてはるの行へもしらぬまにまちし桜はうつろひにけり(よるかないし)
- 4204 1-1古今80「まちし桜も」
 えだにてもあだにちりぬるはななれば落ちて水にあわとこそなれ
 (すがののたかよ)
- 4205 1-1古今81「枝よりも」「あだにちりにし」
 はるさめのふるはなみだか桜花ちるををしまぬ人しなければ(くろぬし)
- 4206 1-1古今88
 さくらばなはるくははれる年だにも人のこころにあかれやはせぬ(伊勢)
- 1-1古今61、3-15伊勢集225、2-6和漢朗62「あかれやはする」
- 4207 みる人もなきやまざとのさくらばなほかのちりなん後ぞさかまし(いせ)
 1-1古今68、2-3新撰和49、3-15伊勢集104
 程もなくちりなんものを桜ばなこころひささもまたせつるかな
- 4208 5-10亭子合8
 風さへもてさわぐかなさくら花心にだにもはるをまかせて
- 4209 3-15伊勢集118「はるにまかせじ」
 けふこずはあすは雪とぞふりなましきえずは有りとも花とみましや(なりひら)
- 4210 1-1古今63、3-6業平3、5-415伊勢語29、7-2業平22「きえず
 はありと」
- 4211 さくらばなこづたひちらすうぐひすのうつし心もわがおもはなくに(人丸
 <未詳>)
- 4212 はるがすみたなびくやまのさくらばなうつろはんとや色かはり行く(おなじ人
 1-1古今69
- 4213 世の中にたえて桜のさかざらば春の心はのどけからまし(なりひら)
- 5-389土左記52、7-2業平46、5-266三十人44、5-268深窓秘19、1
 1-1古今53「なかりせば」、2-3新撰和69「なかりせば」、2-5金玉
 15「なかりせば」、2-6和漢朗123「なかりせば」、3-6業平4「な
 りせば」、5-52前十五5「なかりせば」、5-267三十六47「なかりせば」、
 5-269九品和5「なかりせば」
- 4214 いもがなにかけたる桜はなちらばつねにやこひんいやとしのほに
 2-1万葉3809「はなさかば」
- 4215 はるさめにあればてさける桜ばなつねにちらさでみるよしもがも
 <未詳>

- 4216 かにはさくら
かづけどもなみのなかにはさぐられて風ふくことにうきしづむ玉
1-1 古今 427
- 4217 花ざくら
花ざくらいかでか人のおもてみぬ後こそまさる色もいでこめ (みつね)
7-5 躬恒 155 「をりてみぬ」、5-10 亭子合 15 「さくらばな」 「をりてみぬ」
はなざくらをるにたもとのひちぬればつゆにかかれる色にぞ有りける
〈未詳〉
- 4219 花ざくら
花ざくら今さかりなりおもひこしかざしにしてはちらばちるとも
2-1 1 万葉 824 「うめのはな」 「おもふどち」 「かざしにしてな」 「いまさ
かりなり」
- 4220 山ざくら
山もよにさけるさくらのにくからぬいもにあひみてこふる比かも
〈未詳〉
- 4221 さくらばなさきにけらしなあしひきのやまのかひよりみゆるしら雲 (つらゆき)
1-1 1 古今 59、2-3 新撰和 39
- 4222 山たかみ見つつわが行くさくらばな風は心にまかすべらなり (おなじ)
1-1 1 古今 87 「みつつわがこし」
- 4223 たれしかもとめてをりつるはるがすみたちかくすらん山のさくらを
1-1 1 古今 58
- 4224 こえぬ間はよしののやまのさくらばな人づてにのみ聞きわたるかな (おなじ)
1-1 1 古今 588、3-19 貫之 546 「さきやわたらん」
- 4225 ちるとのみみてやかへらん山ざくらはなのおもはん心あるものを (みつね三首)
7-5 躬恒 38 「さくらばな」 「こころもあるものを」、3-12 躬恒 392 「さ
くらばな」 「こころもあるものを」
- 4226 山ざくらふきくる風のぬれぎぬは花のこころを知る人ぞほす
7-5 躬恒 11 「ふきいづる風の」 「しる人ぞなき」
- 4227 ちるにだにあはましものを山桜またぬは花のつらきなりけり
3-12 躬恒 381 「つらきなりけり」、7-5 躬恒 27 「つらきなりけり」
- 4228 みよしのの山べにさけるさくらばなしら雲とのみあやまたれつつ (ともりのり)
2-3 新撰和 41 「やまべにたてる」、1-1 古今 60 「雪かとのみぞ」 「あ
やまたれける」、3-11 友則 5 「雪かとのみぞ」 「あやまたれける」、5
-5 寛平中 4 「雪かとのみぞ」 「あやまたれける」、5-4 寛平后 13 「山
に咲きたる」 「雪かとのみぞ」 「あやまたれける」、1-2 後撰 117 「よし
の山の」 「見えまがひつつ」
- 4229 わが恋にくらぶの山のさくらばなまなくちるともかすはまさらじ (これひら)
1-1 1 古今 590、3-16 是則 27 「わがこひを」
- 4230 いそのかみふるのやまべのさくらばなうゑけん時をしる人ぞなき (へせう)
1-2 後撰 49、3-7 遍昭 4
- 4231 やまもりはいはいはなん高砂のをのへの桜をりてかざさん (そせい)
1-2 後撰 50、3-3 家持解 1、3-9 素性 56 「をりつくしてむ」
- 4232 山たかみ雲ぬにみゆる桜ばなこころのゆきてをらぬ日ぞなき (おなじ)
1-1 1 古今 358、2-3 新撰和 43、3-12 躬恒 4、7-5 躬恒 362、2-5
金玉 13、5-1 264 和十種 46、5-1 265 和十体 19、5-1 267 三十六 23、6-4 如
意宝 21、5-1 266 三十人 23 「をらぬひはなし」、5-1 268 深窓秘 16 「をらぬ
ひはなし」、6-3 継色紙 12 「をらぬ日はなし」

4233 あし引のやまざくら花ひならべてかくさきたらばいとこひめやは

2-1万葉1429 「いたくこひめやも」

にはざくら

4234 朝ごとに我がはくやどのははざくらはなちるほどは手もふれでみん

5-20近江合7、1-3拾遺集61、1-3拾遺抄38

はざくら

4235 あづさ弓はるの山べに煙たちもゆともみえぬ火ざくらはな(みつね)

5-20近江合6、7-5躬恒72「かすみたち」、3-12躬恒422「かすみたち」

ふぢ

4236 我がやどの池のふぢなみさきにけり山ほととぎす今やきなかん(人丸)

2-13新撰和121、3-1人丸171、1-1古今135 「いつかきなかむ」、5

1-264和十種14 「いまやなくらん」、3-12躬恒92 「さきしより」 「またぬ
ひぞなき」

4237 こひしくはかたみにもせんわがせこがうゑしふぢなみ花咲きにけり(あか人)

2-1万葉2123 「かたみにせよと」 「うゑしあきはぎ」、2-1万葉1475 「こ

ひしけば」 「かたみにせむと」 「わがやどに」 「いまさきにけり」、3-13
家持42 「かたみにせんと」 「わがやどに」、3-1人丸105 「かたみとせんと」

「うゑし秋はぎ」、1-3拾遺集837 「かたみにせむと」 「わがやどに」 「う
ゑし秋はぎ」 「今さかりなり」

4238 藤なみのかけなるうみのそこきよみしづむいしをも花とこそそみれ

2-1万葉4223 「かげなすうみの」 「しづくいしをも」 「たまとぞわがみる」

4239 たごのうらのそこさへにはふ藤波をかざしてゆかんみぬ人のため

2-1万葉4224、3-1人丸172、1-3拾遺集88、2-6和漢朗135 「たご

のうらに」、5-1266三十人4 「たごのうらに」

みなそこにかげをうつしてこむらさきそめてかけたるきしの藤なみ

〈未詳〉

4240 うつろはぬまつのなたてにあやなくもやどなるふぢのさきてちるかな

3-19貫之99 「やどれる藤の」、2-6和漢朗136 「ときはなる」 「かかれ

るふぢの」

4241 水にさへはるやくるとたちかへりいけのふぢなみをつつぞみる(つらゆき)

3-19貫之106

藤のはな本よりみずはむらさきにさける松とぞおどろかれまし(おなじ)

3-19貫之129

4242 みどりなる松にかかれるふぢなれどおのが比とぞ花はさきける(同)

3-19貫之50、2-13新撰和107 「まつにかけたる」 「おのがこころと」

4243 かけてのみみつぞしのぶからころもうすむらさきにさける藤波(みつね)

3-12躬恒441 「なつごろも」、7-5躬恒94 「夏衣」

4244 よにもにずたれかさけてふむらさきの色ゆゑにこそ花も咲きけれ(おなじ)

3-12躬恒431 「はなゆゑにこそ」 「はるもをしけれ」、7-5躬恒79 「花

ゆゑにこそ」 「はるもをしけれ」

4245 我がやどにさける藤なみたちかへりすぎがてにのみ人のみるらん(おなじ)

1-1古今120、7-5躬恒267、2-3新撰和103

4246 よそにみてかへらん人にふぢのはなはひまつはれよとかむまをだに(へぜう)

1-1古今119 「えだはをるとも」、3-7遍昭33 「とがむばかりに」、2

1-3新撰和105 「はひまとはれよ」 「えだはをるとも」

4249 我がやどのかげともたのむ藤のはなたちよりくともなみにをらるな(おなじ人)

1-2 後撰120、3-15 伊勢集65 「うちよりくとも」

たちばな

4250 たちばなはみさへ花さへそのはさへえだにしもふれどはやときはの木

2-1 万葉1014 「えにしもふれど」「いやとこはのき」、3-3 家持158 「た

ちばなの」「ふたさへいれど」「まさる時なき」

ときはなる花とおもへばやほととぎすはなたちばなにこゑのかはらぬ

(つらゆき)

〈未詳〉

4252 年ごとにきつっこゑするほととぎすはなたちばなやつまにはあらん(おなじ)

3-19 貫之344 「つまにはあるらん」

4253 ほととぎすなどかきなかぬ我がやどの花橘のみになるまでに(みつね)

3-12 躬恒432 「みになるよまで」、7-5 躬恒81 「などかきまさぬ」、2

1-1 万葉1958 「きゐもなかぬか」「つちにおちむみむ」

4254 もとくたちきよき月よにわぎもこがみせんと思ひしやどのたちばな(やかもち)

2-1 万葉1512 「もちぐたち」「わぎもこに」

4255 さつきまつはなたちばなのかをかげばむかしの人の袖のかぞする

(伊勢なりひらくこそ)

1-1 古今139、2-3 新撰和127、5-415 伊勢語109、2-6 和漢朗173

4256 やどりせしはな橘もかれなくになどほととぎすきなかざるらん(千さと)

1-1 古今155 「こゑたえぬらむ」

4257 今朝きなきいまだたびなる時鳥はなたちばなにやどはからなん

1-1 古今141

4258 たちばなのもとかげふむやとまたに物をぞおもふ人にしられず

(たかはしのやす丸)

2-1 万葉1031 「もとにみちふむ」「やちまたに」「ひとにしらえず」、2

1-1 万葉125 「かげふむみちの」「やちまたに」「いもにあはずして」

4259 我こそはにくくもあらめわがやどの花たちばなをみにはこじとや

2-1 万葉1994、3-2 赤人265、3-1 人丸70 「花たちばなは」「みにも

こじとや」、6-5 麗花集92 「はなのさかりを」、1-3 拾遺集1261 「花見

にだにも」「君がきまさぬ」、1-3 拾遺抄446 「花見になどか」「きみが

きまさぬ」

あへたちばな

4260 わぎもこにあはでひさしくむましたのあへたちばなのこけおふるまでに

2-1 万葉2760 「あはずひさしも」「うましもの」「こけむすまでに」、3

1-3 家持291 「わがせこを」「こひてはひさし」「むまおひの」「こけおふ

るまで」